

明けて見たら忽然と死んでいたのである。古今東西の戦史に類例のない悪夢のような遭難事故がなぜ発生したのであろうか。

後日、聞いた話によると「相当の雨量になる」というのが各連隊長の一致した見方で、「十四日の夜行軍を十五日の昼行軍に変更することが望ましい」という要望を司令部に意見具申したという。しかし参謀長が米機の来襲をおそれるのあまりこれを却下した、ということだった。このことは待機命令が出発命令となって、夜行軍が強行されたことで頷かれる。

次に、帝国陸軍では兵器が人命より優先しており、特に菊のご紋章が刻まれた歩兵銃は、手放すことなどもつてのほか、命をかけても手中に取り戻さねばならなかった。

また日本では想像もつかない一日の中に夏と冬が同居しているような、気温の変化を伴う大陸特有の気象であり、車軸を流すような一大集中豪雨に見舞われ、さらに長途の南下作戦により体力が消耗しきった上での夜行軍といった、悪条件が重なれば、多数の遭難者を出したの

は当然の帰結であろう。

それにしても死んだ兵士たちこそ哀れであった。彼らはすべて「凍死(とうじ)」「死」ということで処理された。謹んでご冥福をお祈りする次第である。

戦史に残らない私の証言

和歌山県 杉 若 久 嘉

沖繩で玉碎した石兵团が、その前任地、中国山西省を発つとき、私は若干の考らに交じって、そこに残り残された。そして、その地の後任警備のため新たに編成された部隊、皇兵团の第一四七五部隊第一中隊に転属となった。

そしてこの部隊で敗戦を迎えたのであるが、それから後に体験した、戦史の光も当てられない悲劇の同胞について証言したい。

終戦の少し前から中国共産党軍は、積極的な活動を始めていた。それは日本敗戦近しと知って、日本軍駐屯地

のあとを、政府軍よりも先に支配下に入れるためであった。

山西省には軍閥の將、閻錫山が率いる中国第二戦区軍としてのいわゆる「山西軍」がいたが、すこぶる弱軍となっていた。しかし、この地における敗戦日本軍を受降（降参さす）すべき中国政府の正規軍は、山西省から遠い所にいた。そこで蒋介石は第二戦区軍を受降軍として指令し、同時に日本軍に対しても「他のいかなるもの（中共軍を指す）から受降を要求されても、これに応じてはならない。もし拒否することで攻撃されれば、これと戦っても装備を保持し、暫時その所在地での交通と秩序を維持せよ」と命じてきたのである。

山西省は、古来から中国では要衝の地であり、中共側としても重要視したのは当然である。したがって終戦の八月十五日から時を移さず、日本軍にたいして受降を要求し、山西省の進路に立ちはだかったのである。要求を拒絶する日本軍とも至るところで激戦が展開されることとなった。山西軍の先遣部隊によって一度は武装解除を受けた私たちの部隊は、その翌日には再び武器を返され、

中共軍に包囲され苦戦している山西軍主力部隊の救援に向かったのであった。

そして、この時から四年間、山西省では混沌とした事態が続き、残留を余儀なくされた多くの日本軍人や民間人が、中国内戦に巻き込まれて、悲惨な結末となったのである。

私の所属部隊は、山西省南寄り中央部の沁県（シンケン）という所にあったが、終戦の日より一週間後の八月二十二日から三日間、中共軍数方の攻撃を受け、大激戦の末、なんとか防衛することができた。それからの毎日、終戦以前よりも険悪な状態が続き、復員のための集結移動が遅々として進まなかった。

昭和二十年も暮れ近いころになって、「日増しに激しくなる中国内戦の中であって、在留邦人の引揚げに危険がせまり、軍隊の復員もままならない。すべて無事帰国させるには強力な後衛尖兵が必要だ。また、第二戦区軍司令官、閻錫山からは今後共産軍との対抗で優位にたつてゆくには、どうしても日本軍の協力が欲しいといって、相当な兵力の残留を強く要求してきている。今、これに

応えることによって、これからの真の日中和平樹立に役立つことができよう。また資源豊富なこの山西省に、日本復興の拠点を確保することにもなる。やがては米・ソ間に対立が起こり、われわれはそのキャスティングポートを握ることもありうる。そうなれば敗戦祖国復興への礎となり得るのだ」と、軍指令部から説得者が我々のところへやってきた。

これについて前段はまあ良いにしても、後段はまるで「大東亜共栄圏」的発想の延長である。だがその当時では、軍国主義時代に育った我々世代にとって、この言葉にあまり疑念も抱かず、むしろ血を湧かせ勇躍しても不思議ではなかったと言えないか。

しかし、一方では別な噂も伝えられてきた。例えば、本音を隠した残留画策者がいて、巧言を弄し運動をしているのだというのである。この本音とはどんなことなのか、あれこれ取り沙汰されたものの、突き止めるまでには至らない。

後日、残留首謀者の中心人物と自認する人の著書を読んだが、巧みな建前論の展開で、山西残留を正規の義挙

だったと美化し、これだけのことを「俺がやったんだ」と言わんばかりである。とまれ、当時風聞したと思える「本音」についてはあまり特筆されていないようだ。ことによれば「本音」をもった第三者がいて、残留理念に便乗したのであろうか。

やがて、残留の呼びかけを正しいと信じる者と、少なからず疑いを持つ者とに二分されていった。恥ずかしながら私は前者の方であった。心情としてはだれしも故郷へ、肉親のもとへ、の帰心は強いだけに我々は随分と悩んだのである。

終戦の翌年四月末ごろまでに、何とか残留の大勢はほぼ固まった。山西省を任地としていた第一軍の隷下であった私たちの塁兵団及び「将」「固」「造」「至降」等の各兵団と、駐蒙軍の「至誠」部隊大同大隊からの将兵とともに、民間人も合わせて数万人が残留することになったのである。

そしていよいよ二十一年五月、山西残留は決行されたのであるが、昭和二十四年四月にはあまりにも無残な結末を迎えたのであった。この約四年間には山西省各地で、

中共軍との間で何度も激しい戦闘が繰り広げられた。

なかでも特に昭和二十三年七月、残留日本人と中国人による混成の山西軍主力が壊滅的な打撃を受けたのである。この時の熾烈にして悲惨な戦闘は、かの沖繩戦に比べて時間的、空間的にスケールは小さくとも、質的には上回るものであっただろう。

それから間もなく私は、同年九月末、無事帰国することができたが、翌二十四年四月、山西省の主都太原市が陥落したときの戦況は、さらに苛酷きわまる様相であったとのことである。

そうした四年間にも数度あった帰国のチャンスを握りつぶされ、あえなく戦死してしまった人々も少なくない。

この山西残留戦による戦死者や、病死者の数は約六〇〇人といわれる。負傷者ははるかにそれを上回るだろう。また心ならずも中共軍に捕われ、六、七年も抑留された人々の数はさらに多いと思う。

特に異国の土となった方たちには、深く哀悼の意を表するものである。

永い間全く慰霊式の行われる気配もないまま、三十三

回忌の時期が近づいてしまったので、じっとしておれなくなつた私は、身のほども考えずしゃり出た。帰国したとき持ち帰ってあつたガリ版刷りの古びた名簿を唯一の手掛りとして、元墨兵団関係の残留者を中心に数年がかりで約二〇〇人ほど捜し当て、姫路の戦友二人の絶大な協力奉仕によって、昭和五十三年七月その法要を営んでいたことができた。

参加者はご遺族を含めて六〇人。北は北海道から南は九州まで、熱烈なご参加を得られ、それはもう劇的なほどに情熱に満ち、私自身陶醉してしまった。布川直平部隊長のご遺族もその直前に消息が判明し、ご長男が北海道から飛んでこられた。

この席で元隊長村山隼人氏の提案で、二年に一度の定期集会を開催することが決まった。そして昭和五十七年七月、阪神在住者の尽力で、初回を上回る盛大な集会が開かれた。そこで改めて「山西残留を語りつぐ会」と新名称も決まったのである。

山西残留は四か年にもわたる大事変だったが、あまり世間に知られていない。このままではやがて忘却の彼方

へ消えていくであろう。一下士官に過ぎなかった私には、すべてを正確に語れるほど詳しくはない。しかし、今のうちなら残留体験者もまだ大勢健在のはず。体験者には「語りつぐ」義務があると思う。生きているうちにみんなで協力したいものだ。

人類は平和でなければならぬ。いや、すべての生物が平和共存のための良きリーダーであるべきだ。そのための「生き証人」として、私たち『大正生まれ』を中心とする世代は、日本歴史始まって以来の動乱期を生きぬいてきた、唯一の存在であることを自覚すべきであろう。入隊するまで『極右思想』に共鳴していた私は、山西に残留し、中国内戦に参加したことによって『戦争』とは何かを、もう一度初めから考え直すようになった。戦場で、青春を無惨に散らせた敵味方を思う今、日夜この手に数珠をはめている。世界の本当の平和が到来することを、ひたすら希って。

二度の傷病をのりこえて

滋賀県 奥野豊蔵

まず私の家族構成から書き始める。現在は六人家族で、当時は妻と子の三人家族だった。

昭和十九年三月二十九日、三十六歳の私は第一補充兵役で中部第四十六部隊（姫路）に応召を受けて第二中隊に編入、植田隊小笠原班で教育召集が始まった。

四月六日夜分には行先不明の貨物列車で姫路を出発して下関、博多を経て釜山から朝鮮平壤に到着し、ひろびろとした小高い丘で毎日訓練があった。

そして六月のある日、日射しの強い暑い中を軽機関銃を操作して坂を登ったり降りたりするうち、めまいが起こり戦友に助けられて療養所に運ばれ療養した。その時、夢のような召集解除の命令があり、陸軍二等兵に進級した。七月五日に平壤をあとに釜山から博多港に上陸して懐かしいわが家に帰ってきた。